

の成も出隅に向って大きくなっている。

○化粧隅木、谷木、について、隅木にたるき削りとし隅木と垂木上端をそろえる。隅木の見え掛り寸法は幅は垂木幅の2倍位、成は垂木成の2倍位とする。

### ● 母屋 (もや)

棟木～軒桁間に架設される部材で、垂木等の長さ(定尺)や軒先化粧の垂木などの長さを検討、配慮し、母屋位置(間隔)を決め、小屋伏(勾配グループ)図に表示する。

母屋の上端(幅の1/2位)に垂木あたりの加工について、あたり欠ぎの加工をするか、勾配は削った加工をする。

母屋の継手について、棟木と同じ加工法で、各母屋の継手か所が歪しになる様に加工架設すること。寄棟の場合の母屋の端部(仕口は渡り懸掛け)東真より150mm(5寸)位のばすこと。

### ● 小屋束 (こやつか) 小屋束柱

小屋束の位置は、小屋組(水平グループ)と、小屋組棟木、母屋(勾配グループ)との関係で決まってくる。

小屋束と棟木、母屋との仕口は長柄差しとして、込栓(こみせん)を打ったり、割りくさび打ちなどがあり、現代の工事では金物(鋸両面打ち)で棟木、母屋を緊結する例が多い。必ず小屋束上部の柄は長柄差とすること。

最近よく見うけるのは上部短柄差が多く棟木や母屋が東に対しかたむいているのが多い。特に垂木取付け時にかたむきが発生しやすい。

★長柄差の特徴～柄の加工、柄穴の加工による→軸組の柱の仕口柄で記述する。(長柄は架設組み後は簡単にははずせない。)

小屋束下端、小屋梁や桁との仕口面は基本的には水平(レベル)に加工し柄は短柄とし、金物(両面鋸打ち)にて緊結すること。

屋根の大きさで、束の長さがあまり長くなる場合等には、「二重梁・天秤梁」等を入れて、調整するように考えるべきである。

○1本拾いでは必ず、1本の必要長さや数量を記入する事。

○必要長さ～棟木・母屋上端～桁天端+50mm(1.7寸)(50mm単位に端数切上げ)

### ● 小屋雲筋違 (こやくもすじかい)

小屋雲筋違(桁行方向)棟木・母屋と同じ方向に小屋束の振れ止め、桁行方向の筋違として取付ける部材で、一般的には柱材の3割位が使用される。棟木母屋下端～桁天端迄が750mm(2.5尺)以上のか所に架設する。また一節の数量は必ず偶数量とする。

部材の余長は小屋束外面より筋違いの成の1.5以上かつ210mm(7寸)以上とする。筋違い上部では小屋束～棟木母屋迄延ばすこと。

○切妻屋根では妻側束の垂直(軸組と直線)であること。寄棟の場合棟真と軒桁真の勾配長さが同じであること。などの確認。